

軒もる月

樋口一葉

青空文庫

「我が良人をつとは今宵こよひも帰りのおそくおはしますよ。我が子は早く睡ねむりしに、帰らせ給はゞ興きようなくや思おぼさん。大路おほぢの霜こほに月氷こほりて、踏ふむ足あしいかに冷たからん。炬燵こたつの火かもいとよし、酒さけもあたゝめんばかりなるを。時は今何なんどき時ときにか、あれ、空そらに聞きゆるは上野うへの鐘かねならん。二ツ三ツ四ツ、八時はちじか、否いな、九時くじになりけり。さても遅おそくおはします事ことかな、いつも九時くじのかねは膳ぜんの上うへにて聞きき給たまふを。それよ、今宵こよひよりは一時いちじづゝの仕事しごとを延のばして、この子こが為ための取と入いを多くせんと仰おほせせられしなりき。火氣くわきの満みちたる室むろにて頸くびやいたからん、振ふりあぐる鎚つちに手首てくわや痛いたからん」

女おんなは破やれ窓まどの障子しやうしを開ひらきて外面そともを見みわたせば、向むかひの軒のきばに

月のぼりて、此処こゝにさし入る影はいと白く、霜や添きひ来し身内も
ふるへて、寒気は肌はだに針さすやうなるを、しばし何事も打うちわすれ
たる如ごとく眺ながめ入て、ほと長くつく息、月かげに煙をゑがきぬ。

「桜さくらまち町の殿とのは最早寝処もはやしんじよに入り給いひし頃ころか。さらずは燈火ともしび

のもとに書物をや開ひらき給ふ。然さらずは机の上に紙を展のべて、静か

に筆をや動かし給ふ。書かせ給ふは何ならん、何事かの御打合おんうちあは

せを御朋友ごほうゆうの許もとへか、さらずば御母上おんはうへに御機嫌おきげんうかゞひの御

状どうか、さらずば御胸おむねにうかぶ妄想ぼうさうのすて所どころ、詩か歌か。さらず

ば、さらずば、我が方かたに賜たまはらんとて甲斐かひなき御玉章おんたまづさに勿もつ躰たい

なき筆をや染め給ふ。

幾度いくたび幾通いくつうの御文おんふみを拜見らいけんだにせぬ我れ、いかばかり憎にくし

とおほ思しめすらん。拜はいさばこの胸むね寸断になりて、常の決心の消えう
 せんおほつか覚束なさ。ゆるし給へ、我れはいかばかり憎くき物おほに覚し
 めされて、物知らぬ女子をなごときげすみ給ふも厭いとはじ。我れはかゝる
 果敢はかなき運を持ちてこの世に生れたるなれば、殿が憎くしみに逢あ
 ふべきほどの果敢なき運を持ちて、この世に生れたるなれば、ゆ
 るし給へ、不貞をなごの女子はからに計はせさせ給ふな、殿。
 卑賤ひせんにそだちたる我身わがみなれば、始はじめよりこの以上うへを見も知らで、
 世間は裏屋に限れる物と定め、我家わがやのほかただに天地のなしと思はゞ、
 はかなき思ひに胸も燃えじを、暫時しばしがほども交りし社会は夢に天
 上に遊べると同じく、今さらに思ひやるも程とほし。身は桜町さくらま
 家ちけに一年いちねん幾度いくどの出替り、小間使こまづかひといへば人らしけれど、御ごて

寵愛うあいには犬猫いぬねこも御膝おひざをけがす物ぞかし。

言はゞ我が良人をとつをはづかしむるやうなれど、そもそも御暇おいとまを賜はりて家に帰りし時、聳むこと定まりしは職工むこにて工場こうばがよひする人と聞きし時、勿躰もつたいなき比らべなれど、我れは殿の御地位ごちゐを思ひ合せて、天女が羽衣はごろもを失ひたる心地もしたりき。

よしやこの縁ゑんを厭いとひたりとも、野末の草花さうくわは書院の花くわびん瓶びんにさゝれん物か。恩愛おんあいふかき親おやに苦を増させて、我れは同じき地上じやうじやうに彷彿さまよはん身の、取とりあやまちても天上てんじやうは叶かなひがたし。もし叶かなひたりとも、それは邪道じやだうにて、正当の人の目よりはいかに汚けがらはしく浅あましき身とおとされぬべき。我れはさても、殿とのをば浮世うきよに誹そしらせ参まゐらせん事ことくち惜おぼし。御覽ごらんぜよ、奥方おくかたの御目ごめには我れを憎にくしみ、

殿をば嘲りの色の浮かび給ひしを」

女子は太息に胸の雲を消して、月もる窓を引たつれば、音に目

さめて泣出る稚児を、「あはれ可愛し、いかなる夢をか見つ

る。乳まいらせん」と懐あくれば、笑みてさぐるも憎くからず、

「勿躰なや、この子といふ可愛きもあり。此子が為、我が為、

不自由あらせじ、憂き事のなかれ、少しは余裕もあれかして、

朝は人より早く起き、夜はこの通り更けての霜に寒さを堪へて、

『袖よ、今の苦労は愁らくとも、暫時の辛棒ぞしのべかし。や

がて伍長の肩書も持たば、鍛工場の取締りとも言はれなば、

家は今少し広く、小女の走り使ひを置きて、そのかよわき身に

水は汲まさじ。我れを腑甲斐なしと思ふな。腕には職あり、身は

健かなるに、いつまでかくてはあらぬ物を』と口癖くちぐせに仰せらるゝは、何所どこやら我が心の顔に出で、卑しむ色の見えけるにや。恐ろしや、この大恩の良人おととに然る心さを持ちて、仮にもその色の頭あちはれもせば。

父の一昨年おととしうせたる時も、母の去年うせたる時も、心からの介抱よに夜るも帯を解き給はず、咳せき入るとては背を撫なで、寐ねがへるとては抱だき起おこしつ、三月みつきにあまる看病ひとでを人手ひとでにかけじと思し召おぼの嬉うれしき、そのみにても我れは生涯せうがい大事だいじにかけねばなるまじき人に、不足らしき素振そぶりのありしか。我れは知らねど、さもあらば何なんとせん。果敢はかなき楼阁かくかくを空中くわくちゆうに描えがく時、うるさしや我が名の呼よびびこえ、袖そで、何なんせよ彼かせよの言い付ひけに消されて、思おもひこゝに絶たゆれ

ば、恨うらみをあたりに寄せもやしたる。勿もつたい躰なき罪は我が心よりなれど、桜町の殿といふ面おもかげなくば、胸の鏡に映るものもあらじ。罪は我身わがみか、殿か、殿だになくは我が心は静しづかなるべきか。否いな、かゝる事は思ふまじ。呪咀じゆその詞となりて忌むべき物を。

母が心の何方いづかたに走れりとも知らで、乳に倦あきれば乳房に顔を寄せたるまゝ思ふ事なく寐入ねいりし児ちごの、頬ほは薄うす絹ぎぬの紅べにさしたるやうにて、何事を語らんとや、折々をりく曲まぐる口元の愛らしき、肥えたる腮あごの二重ふたへなるなど、かかる人さへある身にて、我れは二夕心ふごころを持ちて済むべきや。夢さら二夕心は持たぬまでも、我が良人おととを不足に思ひて済むべきや。はかなし、はかなし、桜町の名を忘れぬ限り、我れは二夕心の不貞おなごの女子おなごなり」

兎ちうを静かに寢床にうつして、女子をなごはやをら立たちあがりぬ。眼めぎし
 定さだまりて口元かたく結びたるまゝ、畳の破れに足も取られず、心
 ざすは何物ぞ。葛籠つづらの底に納めたりける一二枚いちにまいの衣きぬを打うちかへし
 て、浅黄あさぎちりめんの帯揚おびあげのうちより、五通つう六通、数ふれば十二
 通つうの文ふみを出いだして旧もとの座もどへ戻れば、蘭燈らんとうのかげ少し暗きを、捻ねぢ
 出いだす手もとに見ゆるは殿の名。「よし匿かくしな名なりとも、この眼めに
 感じは変るまじ。今日まで封じを解かざりしは、我れながら心強
 しと誇りたる浅あさはかさよ。胸のなやみに射る矢のおそろしく、思
 へば卑怯ひきようの振舞ふるまひなりし。身の行ひは清くもあれ、心の腐りの
 すてがたくば、同じ不貞の身なりけるを、いざさらば心こゝろだめ試し
 に拝し参らせん。殿も我が心を見給へ、我が良人をつとも御覽ぜよ。

神もおはしまさば我が家の軒に止まりて御覽ぜよ、仏もあらば

我がこの手元に近よりても御覽ぜよ。我が心は清めるか濁れるか」

封じ目ときて取出せば一尋あまりに筆のあやもなく、有難

き事の数々、辱じけなき事(かた)の山々、思ふ、恋ふ、忘れがたし、血

の涙、胸の炎、これ等の文字を縦横に散らして、文字はやがて

耳の脇に恐しき声もて呶くぞかし。一通は手もとふるへて巻納

めぬ、二通も同じく、三通四通五六通より少し顔の色かはり

て見えしが、八九十通十二通、開らきては読み、よみては開

らく、文字は目に入らぬか、入りても得よまぬか。

長なる髪をうしろに結びて、旧りたる衣に軟へたる帯、やつれ

たりとも美貌とは誰が目にも許すべし。「あはれ果敢なき塵塚

の中うちに運命を持てりとも、穢きたなき汚よごれは蒙かふむらじと思へる身の、
 猶なほ何所づこにか悪魔のひそみて、あやなき物をも思はするよ。いざ雪
 ふらば降れ、風ふかば吹け、我が方ほう寸すんの海に波さわぎて、沖の
 釣つり舟ぶねおもひも乱れんか、風なぎたる空に鷗かもめなく春日はるひのどかになり
 なん胸か、桜町が殿の容おも貌かげも今は飽くまで胸にうかべん。我が
 良人をとが所為しよゐのをさなきも強しいて隠くさじ。百ひやく八はち煩ぼん悩のうおのづ
 から消えばこそ、殊こと更さらに何かは消さん。血も沸かば沸け、炎も
 燃へばもへよ」とて、微笑を含みて読みもてゆく、心は大おほ滝だきに
 あたりて濁世だくせの垢あかを流さんとせし、某それの上人がためしにも同じく、
 恋人が涙の文字もんじは幾筋いくすぢの滝のほとばしりにも似て、気や失なは
 ん、心弱をなごき女子をなごならば。

傍そばには可愛かあゆき児ちごの寐ね姿すがたみゆ。膝ひざの上には、「無情の君よ、我
 れを打捨うちすて給たまふか」と、殿おんの御声ごこゑありあり聞きえて、外面そとには良人をつと
 や戻もどらん、更さらけたる月に霜しもさむし。

「たとへば我が良人をつと、今此処こゝに戻もらせ給たまふとも、我れは恥はかしさ
 に面おもてあかみて此膝これなる文ふみとりを取とかくすべきか。恥はづるは心の疚やまし
 ければなり、何かは隠かくくさん。

殿おん、今もし此処こゝにおはしまして、例れいの辱かたじけなき御おことば詞ことばの数々、
 さては恨うらみに憎にくくみのそひて御声おんこゑあらく、さては勿もつ躰たいなき御おの
 命ちいまを限りとの給たまふとも、我れはこの眼めの動うごかん物か、この
 胸むねの騒さわがんものか。動うごくは逢見あひみたき欲ほよりなり、騒さわぐは下に恋こし
 ければなり」

女は暫時しばしうっとり 惚として、そのすゝけたる天井を見上げしが、蘭ら

燈んとうの火かげ薄ほき光を遠く投げて、おぼろなる胸にてりかへすや

うなるもうら淋さびしく、四隣あたりに物おと絶えたるに霜夜の犬の長吠とほえ

すごく、寸隙すきまもる風おともなく、身に迫りくる寒さもすさまじ。

来こし方往かたゆく末すへ、おもひ忘れて夢路をたどるやうなりしが、何物ぞ、

俄にはかにその空虚うつろなる胸にひゞきたると覚しく、女子をなごはあたりを見廻

して高く笑ひぬ。その身の影を顧り見て高く笑ひぬ。「殿、我良わがを

人つと、我子わがこ、これや何者」とて高く笑ひぬ。目の前に散乱ちりみだれたる

文ふみをあげて、「やよ殿、今ぞ別れまいらするなり」とて、目元に

宿れる露もなく、思ひ切りたる決心の色もなく、微笑おもての面に手も

ふるへで、一通いっとう二通にっとう八は九く通つう、残りなく寸断なに為し終りて、熾さか

んにもえ立つ炭火の中へ打込みつ打込みつ、からは灰にあとも止
めず、煙りは空に棚引き消ゆるを、「うれしや、我執着も残らざ
りけるよ」と打眺むれば、月やもりくる軒ばに風のおと清し。

(終)

青空文庫情報

底本：「全集樋口一葉 第二巻 小説編二〈復刻版〉」小学館

1979（昭和54）年10月1日第1版第1刷発行

1996（平成8）年11月10日復刻版第1刷発行

初出：「毎日新聞」

1895（明治28）年4月3日、5日

※「良人」に対する「をつと」と「おつと」、「女子」に対する「をなづ」と「おなづ」の混在、旧仮名遣いにはそわないと思われるものも含めて、ルビは全て底本通りとしました。

入力：もりみつじゅんじ

校正：浅原庸子

2003年3月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

軒もる月

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>